

『莊子』における孔子の役割

若槻俊秀

『莊子』を繙いてみた時、そこには歴史の上で名高い人物たちの豊富な登場をみることができるであろう。そして、他書にはみられなかった各人物にまつわる珍しい事実、あらためて強い興味を覚えることにもなるであろう。ただこのことについては、『史記』を著した司馬遷がその莊子伝中で、「其の著書十余万言、大抵おおむね寓言なり」と評するように、ほとんど歴史的事実として認められぬものが多く取められていることは確かである。

しかし、右のことがらについて莊子は理由をもつと述べている。「寓言は十の九、重言は十の七」。つまり他事に仮託したつくり話は、この書物で語った言葉のうち十分の九を占め、古人の言葉を借りて重みをつけたものが十分の七を占める、と寓言篇で示しつつ以下の如く説明する。真理は言語を絶したものだから、それを表現するためには、他のことを借りて意を現わす方法をとらざるを得ない。また世人はありのままの話よりは他事にこと寄せた話の方をより信じてくれるからであると。このように他事を借りて道を論ずること、これが寓言であり、表現効果上やむをえざる方法である。また「重言」とは、自分自身の語る言葉だが、これは古老の言葉として重みをつけるために採用した方法である。

さて、この方法で演出効果を考慮した後に登場させられた人物は数が多い。そこに登場した人物の一条乱れぬ演技は、さながら名監督である莊子の意のままに動きまわる名俳優たちのごとくで

あって、『莊子』を読むものを終始魅了してやまないものとして
いる。

それら多くの役者の中であって、「無為自然」を説く莊子に對置する「人為」の立場を説く儒家の始祖たる孔子は、まことに重要な役割を与えられている。現本三十三篇の『莊子』の中、二十一篇、五十項目余りにわたっての登場ぶりは、全く他を圧しているといわざるをえない。

『莊子』の中の孔子の活動は確かにめざましいのではあるが、全篇通じてみた時、孔子の性格が必ずしも一貫していないことを知ることができる。いまその性格を大別してみるならば、次の三点に分けられる。

- (一) 礼教に束縛され、世俗において齷齪と動きまわる融通のきかない道徳家として戯画化された孔子。
- (二) 儒者でありながら、道家にも理解ある調和的折中的態度の持ち主としての孔子。
- (三) 儒者としての立場を反省して、その非を悟り道家に改宗する人物としての孔子。

(一)については、全篇通じてみられることであるが、「莊子」中で必要に応じて適宜登場させられていることが知られる。戦国中期の諸子百家の争鳴時代において最大の勢力を誇っていた儒家の始祖である孔子を戯画化し、嘲笑することににより道家の優越せることを際立たせる効果をねらったものであつて、道家である莊子の立場としては当然の表現方法である。(二)については、この名高い孔子が実は道家的素養を内面に秘めた人物であるとするものである。これは内篇にも既にもみられるものであるが、とりわけ外篇、更には雑篇になると特別に強く道家的性格を持った孔子像が描き

出されていこうとを知りうる。(㊦)は、特に山木篇に収載されている二項目等にみえているもので、道徳家孔子のとらわれた生き方を、道の体得者である大公任や子桑雎の指導により反省し、遂に儒家を廃して道家の人としての道を歩むことになるというようなのがそれである。このように主役を演ずる人物群の一人たる孔子を『莊子』において種々に性格の異なる役割りを演じ分けさせることにより、一層それが活々としたドラマ仕立てとして、われわれを読み進ませるのである。

ところで、同じく『莊子』というものの、実は本書の成り立ち、性格を考える場合、そのとりあつかいには慎重さが要求されてきている。現本『莊子』は、大きく三つの部分より構成されている。つまり内篇の七篇、外篇の十五篇、雜篇の十一篇、都合三十三篇である。すでに先学により精密な考察が加えられてきているように、諸篇の成立には、時代の先後があるのであり、それらを踏まえつつ、全篇の性格の違いを考えなければならぬ。

諸氏の説くところでは、『莊子』の中で、おおむね内篇七篇が原莊子に近い内容のもの、外雜篇はそれより後に成るものとされる。このことを考えにいれるならば、孔子が諸篇の中で種々の性格の違いをもって登場しているのも当然のことであり、諸篇の成立の事情を踏まえた上で論を進めなければならぬわけである。

さて如上の諸事情を背景におきながら、『莊子』における孔子の役割をみた時、原『莊子』の姿を保つ内篇の性格から、次第に変貌をみせ、丁度さきあげた類型の(㊦)から(㊧)ないしは(㊨)に移り変わりを示していることを外・雜篇において知ることができる。原初の時代の様相と、外・雜篇の成立した時代との異った様相に帰着することではあるが、孔子が道家的、あるいは道家のシンパ

に性格を変えていつていることは、実は戦国末より漢代に至る黄老思想の発展と無関係ではない。漢代の『淮南子』には色濃くみられることになる黄老思想について、今回は述べる余裕はない。

ここでは時代的には漢代を跳び越えることになるが、易・老子・莊子のいわゆる三玄の学の流行していた六朝時代において『莊子』のどういふ部分、性格が受容されているかを、『論語』の注釈書『論語義疏』を通じて触れてみることにする。

『論語義疏』は梁の皇侃の撰に成るもので、魏の何晏撰『論語集解』を疏釈するものである。斯書において、特に微子篇に見える道家的人物たる幾人かの隠者と孔子との交渉に注目すべきである。

長沮・桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰。夫執與者為誰乎。子路曰。為孔丘。曰。是魯孔丘乎。對曰。是也。曰。是知津也。問於桀溺。桀溺曰。子為誰。曰。為仲由。曰。是魯孔丘之徒与。對曰。然。曰。滔滔者天下皆是也。而誰以是之。且而与其從避人之士也。豈若從避世之士哉。糲而不輟。子路行以告。夫子憮然。曰。鳥獸不可與同群也。吾非斯人之徒与而誰与。

右の文章は、子路を介在者としつつ、道家の立場をとる長沮・桀溺に対して、倫理道徳を説く「方内の士」の立場をとり続ける儒家の孔子の在り方を対比させた箇処である。本章においては孔子が隠者たちの生き方を否定的に述べていることは明らかである。ところが、皇侃の引用する疏注者の一人、沈居士の解説は、各人は已むに已まれぬ持ち分の相違に基づいて在り方が違うのであり、他人を咎めたり羨やむことなく、与えられた持ち分に自得(満足)すればよいのである。したがって長沮・桀溺・孔子はそれぞれ自

得して我が道を歩んでいるのであるから、それを対立したものと考へなくともよいとする。この自得の立場は、晋の郭象の既に説くところであり、その一連の六朝の莊子解釈の流れに乗ったものといえる。実は、この自得は更に窮むれば『莊子』外・雜篇中に特に色濃く表われていた考え方であり、孔子もこの立場においてしばしば登場していたことである。その考え方に基づいて論語における孔子の在り方までも、物分りのよい道家の理解者でありつつ、自得の場として人倫に立脚した生き方を送る者として描かれているのである。このことは実は大きな意味をもつのであり、本来

反体制的姿勢を持つ隠者が、形として山林に身を隠すことなく市中・朝廷に仕えたままに心に隠者の風を抱くだけでも是とされる大乘隠者の考えを導き出すことになったのである。山林に身を隠す本来の隠者を「小隠」、市・朝に隠れる隠者を「大隠」とする隠者観の変遷は、『莊子』外・雜篇における孔子像が後世において、時を得て華開いたものとみられよう。また儒家にとっても、強い毒性を含む莊子の本来の思想を、その毒を柔らげて、甘味をもって人々に迎えられるように変身を遂げさせることが、六朝貴族社会における教養人には不可欠の条件であったからともいえる。